

講師

中原 智美

■ 学歴

1. 2011 年 山口大学医学系研究科 保健学専攻 修士課程 修了

■ 学位

1. 2011 年 修士（保健学）

■ 研究分野

1. 成人看護学
2. 遺伝看護学
- 3.

■ 研究キーワード

1. 慢性期看護
2. 糖尿病教育・看護
3. 多因子遺伝, 遺伝看護
4. 初年次教育
5. がん看護

■ 研究課題

1. 慢性疾患をもつ患者・家族への看護に関する研究
2. 2型糖尿病の遺伝に関する知識が患者の自己管理行動および看護に及ぼす影響についての研究
3. 初年次教育の学修効果に関する研究

■ 担当授業科目

1. [旧カリ] 緩和・がん看護学（前期）必修 / [新カリ] がん看護学（前期）選択
2. 成人看護学演習 （前期）必修
3. 成人慢性期看護方法論 （後期）必修
4. 成人慢性期看護学実習 （後期～前期）必修
5. 看護のための臨床検査 （後期）必修
6. 初年次セミナー I （前期）必修
7. 初年次セミナー II （後期）必修
8. 看護総合演習 （通年）必修
9. 看護総合実習 （通年）必修
10. 看護学 [栄養学科] （後期）選択

■ 授業を行う上で工夫した事項

※ 助教・助手については、実習・演習等の指導を行う上で工夫した事項

1.	授業科目名【緩和・がん看護学（旧カリ）】【がん看護学（新カリ）】 主な担当内容は、がん看護（7 コマ）、症状緩和のためのマネジメント（1 コマ）である。疾患・治療による影響のメカニズムやなりゆきを明確にし、看護の根拠を理解しやすいように組み立て、できるだけ具体的な看護方法を示した。薬物療法に関する内容のボリュームが多いため、本年度より 2 回に内容を分けて講義した。また、がんサバイバーが治療と生活を両立することをサポートするための視点にも重点を置き、法制度や社会資源、チーム連携のあり方を具体的に紹介したり、実際の患者の声（大規模調査のデータ）を題材としたディスカッションを行ったりした。 講義内容の理解を深めるための工夫として、疾患・症状・治療などのイメージが難しいものについては画像を見せたり、医療ドラマなどの話題を盛り込んだり、講義内容と関連のある最新ニュースや新聞記事を紹介するなど、理解を深めるための工夫を行った。 講義終了後には、学び・疑問を記入してもらい、次の講義の冒頭で質問への回答や感想を紹介し、お互いの考え・疑問を共有することにより関心を高められるように努めた。
2.	授業科目名【成人看護学演習】 看護過程演習では、慢性期疾患（肝硬変）の事例を通して看護過程の展開（10 コマ）を主担当として講義した。反転学習として事前に課題に取り組みせ、自分が解決したい疑問点を整理したうえで講義に臨めるように工夫した。講義前後に教員 8 名で指導内容を共有し、講義の指示内容については、教員間で統一をはかった。 提出物へのコメントはあえて個別記載を行わず、全体に共通する事項を Classroom に掲載する方法とした。個別に赤ペン記載すると指摘を受けた部分だけしか見直さない傾向があったが、各自で点検しながら修正することにより改善に繋がった。グループワーク時には理解を促進するよう補足説明を行い、必要時には個別面談を行いフォローアップした。 技術演習は、患者教育、血糖自己測定・インスリン自己注射、ストーマケア、手術後の離床ケアを担当した。
3.	授業科目名【成人慢性期看護方法論】 内分泌・代謝機能／腎・排泄機能／生体防御機能に障害をもつ人の看護（計 8 コマ）を担当した。機能障害によっておこる身体面への影響、疾病のなりゆき、生活面や心理・社会的側面でのなりゆきを予測してアセスメントする力を養うためのトレーニングとして、講義で取り上げた各疾患のアセスメントの視点をふまえた観察項目を考えることを課題として課し、発表により意見を共有するなどの工夫を行った。また、既習の形態機能学、疾病学、薬理学なども想起させながら、看護を理解しやすいように講義の流れを組み立てた。 学習内容への関心を高め、授業への集中力を高めるために、講義終了後に記入してもらった学びや質問を次の講義の冒頭で共有し、単元（2～3 コマ）ごとに小テストを行いこまめに振り返りができるようにした。また、【看護のための臨床検査】の講義内容を本科目の進捗と合わせて設定し、連動した内容となるように工夫した。年末年始など講義の間が空く際には課題を組み入れ、前回内容の復習、次の講義の予習につながるように工夫した。

4.	授業科目名【成人慢性期看護学実習】 本年度は従来通り臨地で実習を行うことができた。実習では、次の 3 点を意識して直接的・間接的に指導を行った。 ①患者を全人的に捉え、これまでのライフスタイルや価値観を尊重した個別性のある看護実践 ②看護展開を通して一貫性・整合性のある思考 ③学生の強みと今後の課題 受け持ち患者の入退院のサイクルは早いため、状況に合わせて学生が実習目標を達成できるように調整し、できるだけケア実践の機会を多く確保できるように努めた。実践することでの気づき、失敗からの学びを大切にして自己や他者を深く理解できるように働きかけた。本年度は、個人面談を行わず、リアルタイムで指導を行えるようにできるだけ臨地に赴き、担当教員と連携しながら指導を行った。学習面、精神面などで特に指導を要す学生に対してはこまめに声掛けを行い、実習目標が達成できるよう個々の問題に応じた指導・支援を行った。また、実習内容、実習場所、実習方法の調整を行い、実習がスムーズに運ぶように努めた。
5.	授業科目名【看護のための臨床検査】 本科目では、基盤となる血液検査、画像検査の基本を押さえたうえで、系統別に検査の特徴、実施法、看護上の注意点が理解できるように構成した。主として、内分泌・代謝系／腎・泌尿器系／血液内科系／皮膚科・耳鼻科・眼科系の検査、技術演習（計 6 コマ）を担当した。できるだけ画像や動画を見せ、検査方法をイメージできるように工夫した。 検査の理解だけでなく、検査の基本やデータ基準値を覚えることを促進する働きかけとして、講義の初めに知識確認テストを行った。また、終了前にはその日の内容について小テストを行い、毎回の講義に集中できるように工夫した。 技術演習では、3 つの項目（スパイロメトリー、心電図、尿検査）について検査方法、結果の判定、看護上の留意点が理解できるように構成した。
6.	授業科目名【初年次セミナーⅠ】 ①講義、課題などのスケジュール自己管理と学修の振り返りのために、ポートフォリオを毎回持参させシラバスで確認するよう指導した。 ②レポート作成にあたり以下の点について改善を行った。 ・学生が苦手とする「問いの発見」については、問いだてを理解しやすいようにシートを 3 段階の 1 系統に絞った形に改善を行った。 ・文献検索法を繰り返し説明し実践させることで、情報の入手法の習熟度を上げる取り組みをした。 ・前年度まで 3 回のレポート作成（500 字、1,000 字、2,000 字）を課したが、これを 1 回（2,000 字程度）にして、同じことの繰り返しにならないように工夫した。 ③グループワークを充実させることを目的に、グループワークを「アイデアの収束法」と「アイデアの発表法」の各 2 回、計 4 回で実施した。「収束法」では KJ 法の基礎を学び、「発表法」で取り組んだディベートにつなげた。

7.	授業科目名【初年次セミナーⅡ】 ①年度により初年次セミナーⅠのゼミを再編成することもあるが、本年は初年次Ⅰのグループワークによりゼミ内の交流ができていることを考慮して、ゼミの再編成は行わないこととした。ただし、同じメンバーでは慣れも出てくる可能性もあるため、グループ内のメンバーをシャッフルした。 ②初年次Ⅰの課題を引継ぎ、シート①②の活用や「問い」の見いだし方を繰り返し指導した。 ③初年次Ⅰのグループ活動によりグループワークに必要なスタディスキルは身につけられた反面、個人で身につけるべきスタディスキルの定着には至らなかった。その課題をふまえ、初年次Ⅱでは個人のスキルアップに重点を置くこととし、レポート作成、発表は個人で取り組むよう計画した。 ④発表までの取り組みをふまえて評価できるよう、発表会はゼミ内で運営し、評価は担当教員が行うように改善した。
8.	授業科目名【看護総合演習〔慢性期・終末期〕】 自己課題に基づいたテーマの設定、および根拠ある看護実践のために文献検索を行い、文献や理論と比較しながら科学的な視点をもってテーマに沿った看護を追求することで今後の課題が明確になるよう指導した。レポート作成時は、研究論文の形式を意識して構成できるように、個別に繰り返し添削指導を行った。また、発表会を行うことでそれぞれの学びを共有でき、最終的に冊子も作成して達成感を感じられるように図った。 そのほか、ゼミメンバーや教員間との連絡・調整などを通して学生が主体的に行動できるよう指導・助言を行った。
9.	授業科目名【看護総合実習〔慢性期・終末期〕】 実習は7月末～8月上旬にかけて実施した。また、各論実習では3時間の時間制限付きでの臨地実習であったが、総合実習では1日実習が可能となったため、実習施設と学生間の打ち合わせを行いながら、実習が円滑に進められるように調整を図った。実習では、看護実践における自己課題を明確にすることができるよう、また、看護の質向上や互いの能力向上のために、メンバー間の連携をとりながら主体的・計画的に行動できるように指導・助言を行った。
10.	授業科目名【看護学】 慢性疾患をもつ患者の看護として「慢性期・終末期におけるがん看護」を2コマ担当した。栄養学科の学生が対象であるため、“がんの治療を受けている患者の看護”を教授する際には、治療方法や用語があまり専門的になりすぎないように配慮して講義した。“終末期における看護”では、その人らしく生きることを支えるためにどのように患者を理解すると良いか、自分自身の「らしさ」とは何かを考えてもらうことで理解を深められるよう工夫した。

■ 学会における活動

	加入時期	所属学会等の名称	役職名等（任期）
1.	2007年4月～現在に至る	日本看護研究学会	
2.	2007年5月～現在に至る	日本糖尿病教育・看護学会	
3.	2007年5月～現在に至る	日本遺伝看護学会	

4.	2012 年 7 月～現在に至る	日本看護科学学会	
5.	2013 年 7 月～現在に至る	日本看護学教育学会	

■ 研究業績等に関する事項（2024 年度）

	発行又は 発表の年月	著書、学術論 文等の名称	単著・ 共著の別	発行所、発表雑 誌等又は発表学 会等の名称	概 要
（著書）					
1.	2024.09.04	プチナース BOOKS 実 習でよく挙 げる看護診 断・計画ガイ ド 第2版	共著	照林社	各科・各領域の実習でよく挙げる 60 の 看護診断の、診断の意味と標準看護計画 を解説している。 (執筆担当) 22：非効果的呼吸パターン P84-85 44：口腔粘膜統合性障害 P136-137
2.					
3.					
（学術論文）					
1.					
2.					
3.					
（翻訳）					
1.					
2.					
3.					
（学会発表）					
1.					
2.					
3.					

■ 外部資金（科学研究費補助金等）導入状況（本学共同研究費を含む）

（1） 共同研究				
	研究題目	交付団体	研究者 ○代表者（ ）内は学外 者	交付決定額 （単位：円）
1.				
2.				
3.				

（2） 個人研究

	研 究 題 目	交付団体	交付決定額 (単位：円)	備 考
1.				
2.				
3.				

■ 社会における活動

	任 期 期 間 等	団体・委員会等の名称 (内 容)	役 職 名 等
1.	2024 年 9 月 7 日	ギラヴァンツ北九州 (チーム主催の防災イベント 「あそぼうさい」における CPR & AED の体験ブース出展)	学生ボランティアのコーディネ ートおよび指導, 引率
2.			
3.			

■ 学内における活動等（役職、委員、学生支援など）

	任 期 期 間 等	会議・委員会等の名称 (内 容)	役 職 名 等
1.	2024.4.1～2025.3.31	学生個人情報保護委員会	副委員長
2.	2024.4.1～2025.3.31	4 年生アドバイザー	
3.	2023.4.1～現在に至る	看護学科 学力向上委員	[知識確認試験] 担当